

Cure to Care 第 1 話

與儀 達朗

【登場人物】第1話

町田 翼（32）（17）：救急医

鈴木 舞（32）（26）：訪問看護師

村井 正和（50）：訪問診療所院長

金城 恵（36）：訪問診療所職員

鈴木 健（52）：外科部長

八木 直久（50）：救命センター部長

新井 亮（29）：町田の後輩の救急医

高井 玲奈（30）：救命センター看護師

* 台詞名は新井に似ているため、玲奈表記

田中 徳次郎（85）：肺がん末期患者

田中 慶子（50）：徳次郎の長女

田中 良子（45）：徳次郎の次女

町田 亜由美（40）（55）：町田の母親

山田（29）：町田の後輩の救急医

島崎（30）：町田の後輩の救急医

救急隊員（22）：救急隊員

高齢患者（95）：救急搬送患者

キャスト1（40）：TVキャスト1

訪問診療医（50）：TVのコメンテーター

覚知（50）：居酒屋の店主

森田（50）（35）：舞の当時の受け持ち

患者

新人看護師（22）：救命救急センター所属

医師A：救命救急センター研修医

看護師A：集中治療室所属

医師B：集中治療室研修医

外科医A：外科部長鈴木の部下

外科医B：外科部長鈴木の部下

幼児（2）：森田の一人娘

ケン（50）：前田救命センター救急医

【あらすじ】第一話

救命救急センターで勤務する救急医の町田翼は後輩と共に、救急搬送されてくる高齢者の対応に明け暮れていた。いわゆる医療難民に加え、かかりつけも含めて急変時の治療コードが定まっていない患者が多く、町田や後輩の心身はすり減っていった。

ある日、外科部長主治医の肺がん末期の患者が呼吸不全で搬送されてくる。町田は苦渋の決断で人工呼吸器を患者に装着するが、救命のために施した処置に対して、患者の長女からは厳しい言葉をかけられ、鈴木からは救急医のエゴではないかと疑われる。救命センター部長が取らせた休暇中に町田は鈴木舞と出会う。舞は、『医療が患者の人生を決める世界が当たり前だったと思うけど、彼らの人生で医療を決める世界もある』と訪問診療所の連絡先を町田へ渡すのであった。町田は、過去の記憶も思い出しながら、村井診療所の見学に赴く。

第一話 「出会い」

○幹線道路・（夜）

夜の街。タクシーが救急車を避けて路肩に寄る。サイレンが遠ざかっていく。ビルの窓に、いくつもの灯りが灯っている。

町田 N 「高齢化社会が加速する日本。202

5年には団塊世代が後期高齢者となり、救急搬送件数は増え続けている」

○救急車・車内（夜）

高齢男性が、救急隊員（32）に心臓マッサージを受けている。

町田 N 「六十五歳以上が、人口の三割、八十五歳以上が、七百万人を超えた」

○前田救命センター・初療室前（夜）

救急車が病院の搬入口に滑り込む。後

部ドアが開く。ストレッチャーで運び出される高齢男性。

○同・初療室（夜）

救急隊員「搬送依頼の患者さんです！ 心肺

停止、C P R 継続中！」

研修医 A 「こっちのベッドへ！」

ストレッチャーが滑り込む。研修医 A が患者の胸骨圧迫を引き継ぐ。足元では、新井亮（29）が骨髄針を患者に刺している。町田は、患者の頭側に立って喉頭鏡を握る。手は震えていない。

町田 N 「人を救うことが、僕の仕事だ。一秒でも早く。一分でも早く。そう教えられてきた」

T 「十五年前」

○町田実家・居間（朝）

町田（17）が大学受験の参考書を抱

えながら姿を見せる。在宅酸素の機械を付けている町田亜由美（40）が、食事の片付けをしている。咳き込む亜由美。

町田「最近調子悪いんじゃ……病院行った方がいいんじゃない？」

亜由美「これくらい大丈夫。というか翼、試験でしょ、今日？」

町田「そうだけど……体気をつけてよ」

亜由美「自分の心配しなさい。早く一人前の医者になってお母さん助けてね」

（回想終わり）

○同・初療室（夜）

町田が、喉頭鏡を入れようとして、ほんの一瞬だが、手を止める。患者の顔が、町田の視界に入ってくる。白髪。深く刻まれた皺。歳月を生き抜いた顔。

町田N「でも、最近わからなくなる時がある」

新井「先輩！」

町田が我に返る。町田は、喉頭鏡を入れて声帯を確認し、チューブを通す。フラットだった心電図モニターが、ゆっくりと波形を取り戻していく。自発呼吸の戻らない患者の胸が、人工呼吸器によって規則的に上下する。

研修医 A「心拍再開です！」

町田と新井は答えない。

町田 N「メデイアでは死に方を選べるようになってきた時代と言われているが……果たしてそうなのだろうか？」

○同・初療室壁

壁の時計。秒針が、てっぺんを越える。

午前零時。日付が変わる。

町田「CTへお願い」

研修医 A「わかりました！」

ストレッチャーが運ばれていく。手袋を外す町田。左手首につけている、色褪せた赤いミサンガに視線を落とす。

N 「僕らがやっている医療は——果たして彼らが望んでいたことなのだろうか？」

○前田救命センター・ステーション（夜）

デスクの上の電話が鳴る。少し荒げに

受話器を取る新井亮（29）

新井 「はい、前田救命センター」

救急隊員（声） 「95 男性、そちらの呼吸器

内科にかかりつけの患者です。呼吸苦の訴えがあります。受け入れ可能でしょうか？」

新井 「ちょっと待ってください」

新井は患者情報をボードに書いて、電話機の保留ボタンを押し、周囲を見渡す。医療スタッフが忙しそうに働いている。町田翼（32）が新井の横に現れる。

町田「新井、うちのかかりつけだろ？」

新井「まあそうですけど……」

新井は受話器を耳にあてる。

新井「受け入れます、名前と生年月日お願いしますー」

新井が電話で救急隊とやりとりを続けている。

○同・初療室前（夜）

腕を組んで救急車を待っている新井。
横に並ぶ町田。

新井「高齢者の搬送ばっかですね……」

町田「まあ、時代が時代だしな」

新井「とは言っても……」

町田「かかりつけの医者が、治療コードの話を全くしたことがない患者さんが多すぎる……ってことだろ？」

二人が顔を見合わせる。

新井「そう、そこなんです」

T 「治療コード…急変の際にどこまで治療をするかという取り決め。たとえば心肺停止の時に心臓マッサージを行うか、行わないかといった治療の選択肢のこと」

新井 「こんな状況がこれからもずっと続いていたら、僕らの心身もちませんよ」
ため息をつく新井。

○同・初療室（夜）

救急隊員が患者である高齢患者（95）を連れて初療室のベッドに移しかえる。
新人看護師（22）が血圧計を巻いて、測定を始める。高井玲奈（30）が新井と町田のほうを見る。

玲奈 「先生、うちのかかりつけみただけど治療コードって決まっているの？」

新井、パソコンでカルテをチェックするが、コードの記載は見当たらない。
患者に酸素マスクを取り付けている町田が新井に声をかける。

町田「どう？」

新井「話し合いの形跡ないです……」

新井がうんざりした顔をする。

玲奈「え、フルコードってこと？」

T「フルコード…急変の際にありとあらゆる救命処置をすること」

新人看護師「フルコードだとどうなるんですか？」

新井「急変の時に、人工呼吸器や心臓マッサージ、電気ショックなどの体に負担がかかる、ありとあらゆる処置を行う。人によってはいわゆる延命処置だよ」

新人看護師「そんな……」

一瞬静まり返る初療室。落ち着いた口調で町田が口を開く。

町田「人工呼吸器が今必要な状況ではないでしょ。幸い酸素投与で落ち着きそう。新井、CT室の手配しておいて」

新井は町田の方を見て頷き、患者移動の準備を始める。呼吸状態が落ち着い

てきた患者がそばにいる町田の右手を
掴む。

高齢患者「人工呼吸器とか言ったけど、頼む
からやめてくれ。亡くなった妻が繋がれて
亡くなったのをみて辛かった……頼む」

町田は患者の掴んだ手を優しく剥がし
て手を握る。

町田「すみません、不安にさせて。今はこの
酸素マスクがあれば大丈夫ですから」

玲奈「CT室の準備できています」

町田「ありがとうございます。移動頼む」

医者Aと新人看護師が患者を連れてい
く。町田は、患者が握っていた自身の
右手を見つめている。

○前田救命救急センター・医師控室（朝）

寝落ちしそうな表情で電子カルテの前
に座っている新井。新井の頬に冷えた
缶コーヒをあてる町田。

新井「冷たい！ありがとうございます」

新井が町田を見て軽く会釈する。

町田「徹夜？」

新井「そうですね……」

町田がホワイトボードに書かれてある入院患者のリストを見る。75歳以上の高齢者が8割以上となっている中で、『かかりつけなし、家族連絡なし』の記載がされている何人かの患者がいる。

町田「独居で身寄りがなかったり、身体的不自由で通院困難……。結果としてかかりつけがない人たちも最近増えてきたな……」

新井「医療難民ってやつですよね？」

T「医療難民…適切なタイミングで医療を受けることが難しい状態にある人」

町田「そうだな」

新井「いざ具合悪くなってから救急車呼んでも手遅れだったり、日頃から健康管理をしていれば防げたかもしれない入院ですよね」

左手に付けているミサガを見ている

町田。

新井「どうかしました？」

町田「いや、なんでもない」

○商店街・大通り

町田が商店街を歩いている。店の前の

ベンチに田中徳次郎（85）が腰掛

けている。

町田「田中さん、お久しぶりです」

田中「おお、町田先生。ちょっと待っててな」

重い足取りで店の奥に行く田中。暫く

して右手にお茶と菓子をもって現れる。

○商店街・店前ベンチ

町田と田中がベンチに横並びで座って

いる。町田がもらったお茶を飲んでい

る。

町田「田中さん、最近見ないと思っていたん

ですけど、どうかされました？」

咳込む田中。

田中「ちょっと入院しててな」

町田「大丈夫なんですか？」

田中「大丈夫よ。あれからどれくらいかな？」

町田「2年くらいですかね」

田中「あの時はひどい肺炎を起こして、先生に人工呼吸器つけて助けてもらったな。

先生は命の恩人だよ」

町田「いえいえ」

田中「あの時影があるからって行って外科の先生紹介してくれたよな？」

町田「たしか……癌だったんですよね？」

田中「そう。今は外科の鈴木先生に診てもらっているけど、調子悪くて時々入院しとる。

どうやら癌が全身に転移しているみたい」

町田「大変ですね……」

田中「正直、体もしんどくてね、もう入院もこりごりだよ。昔みたいには頑張れない」

町田を見て苦笑いの田中。

○同・救命センター部長室

八木直久（50）が椅子に座っており、机を挟んで町田が立っている。

八木「町田、話があるって？」

町田「部長、半ば愚痴になるかも知れませんが、救急搬送患者の大半が、かかりつけがないとか、治療コードが決まってない高齢者です」

八木「まあ、かかりつけ問題については医師会とか周囲のクリニックとの連携を強化している最中なんだ。治療コードについては、昔からうちの内科や外科にも投げかけているんだけどな……」

町田「そのうち僕らの救命処置で望まない人生を送る患者が出ると思うと、正直辛いです。仮に主治医だったら、医療だけじゃなく何かできたかもしれない……」

町田の話八木は黙って聞いている。

八木「そういえば、専門医取って数年なるけど、この後進みたい道とかあるのか？」

町田「まだ次のステップはまだ決まってない

です」

ポケットに入っていた院内ピッチが鳴り電話に出る町田。八木に軽く会釈して、部長室を出ていく。

T 「数日後」

○前田救命救急センター・ステーション（夜）

ナースステーションに集まっている研修医A、看護師A、新井、玲奈の4人。電子カルテを前に何やら不安げな表情の四人。そこに町田が歩いてやってくる。

町田 「どうした？」

新井 「受け入れ要請があって、85歳男性の患者なんですけど。酸素投与では保てなさそうな呼吸状態なんです」

玲奈 「この患者さん、外科部長の鈴木先生の患者で、ステージ4の肺がん末期なんですけど、治療コードの話し合いがされてなさそうで……」

町田が救急隊からの情報が書かれたボードの用紙を見る。患者名に田中徳次郎と書かれている。

町田「新井、ハイフローと挿管の準備頼む。

高井さん、レントゲンとCTいつでも取れる様に手配お願いします」

新井「肺ガン末期の患者を人工呼吸器に繋げるんですか？」

町田「治療方針は俺が家族と話すよ。流石に人工呼吸器には繋がらないと思っている」

○同・初療室（夜）

救急隊が田中徳次郎（85）を運んでくる。初療室のベッドに移される田中。かなりの頻呼吸で顔にはびっしょり汗をかいており、苦しくて会話ができな
い様子だ。新人看護師が血圧測定や酸素飽和度の測定を行う。

玲奈「先生、リザーバー15Lで酸素飽和度

80%しかありません」

新井「ハイフロー装着しましょう」

町田「家族は？」

玲奈「次女さんが来ています」

○同・面談室（夜）

町田と田中の次女である田中良子（4

5）が机を挟んで座っている。

良子「先生、父は助かるんですか？」

町田「いま懸命に治療しています。何かお父様の体のことで聞いていますか？」

良子「長女が病院に連れてついているんですけ

ど、肺がんで全身に転移しているって

……でも主治医の先生からはここ最

近は安定しているって……」

町田「お父様はおっしゃる通り肺がんで全身にもガンが転移しています。一見安定していても、いそいそでもぎりぎりの状態で生活されていますかもしれませんか」

町田「このような形で急に具合が悪くなった

際の治療について話し合ったことはありますか？たとえば人工呼吸器の話とか？」

良子「長女からはなにも聞いてません……」

町田「長女様はいまどちらに？」

良子「出張中でさっき連絡したら朝一で戻ってくるって」

町田「少し長女様と連絡取ってみていいですか？電話番号教えてください」

良子「はい、こちらです」

町田は長女の電話番号に院内ピッチから掛けるが繋がらない。面談室のドアが開き、新井が現れる。

新井「町田先生、ちょっと」

町田「すみません、一旦失礼します」

軽く良子に頭を下げ面談室を出る町田。面談室のドアを閉めて新井の顔を見る。

町田「どうした？」

新井「ハイフローでも呼吸不全が進行しています。このままだともたないですよ。救命のために人工呼吸のサポートが必要だと思います」

います、でも……」

町田「……ちよっと待ってて」

再度面談室のドアを開け、中に入る町

田。軽く息を吸う。

町田「良子さん、落ち着いて聞いてください。

お父様の呼吸状態はいまかなり悪くて命が危険な状態です。救命のためには人工呼吸器のサポートが必要な状況です」

町田「ただ、お父様の状態からは一度人工呼吸器を装着してしまうと、残りの人生は管が繋がったまま一生を終えてしまう可能性が高い」

町田「そのような人生の結末をお父様は望んではいないのではないのでしょうか？」

(フラッシュユ)

田中「正直、体もしんどくてね、もう入院もこりごりだよ。昔みたいには頑張れない」

良子「そんなの……いきなり言われてもわかんないです。お父さん助けてください」

町田「お父様の今後のお姿を考えると人工呼吸はおすすめできません。呼吸苦を緩和する治療も――」

俯き気味だった良子が顔をあげて町田の言葉を遮る。

良子「先生は父を見捨てるのですか？」

町田「そうは言っていないません」

良子「だったら助けてください。二年前は助けてくれたじゃないですか！」

良子は町田に向かって泣きながら頭を何回も下げる。

○同・初療室（夜）

軽く俯きながら足取り重く入ってくる

町田。深く息を吸う。

新井「先輩？」

町田「新井……人工呼吸器につなげる」

一同驚いた表情で町田をみる。数秒間

の沈黙が流れる。

玲奈「患者さん肺がん末期じゃないんですか？」

町田「そうだよ……」

新井「延命処置ってことですか、先輩？」

町田「家族と話し合って救命を優先することになった、フルコードだ」

○同・集中治療室（朝）

人工呼吸器に繋がれた徳次郎。首や手には点滴の管がつながっている。酸素飽和度のアラームが鳴る。突如モニターの心拍数が徐々に落ちていく。気づいた玲奈が慌てて徳次郎の首に手を触れ、脈が触れないことを確認する。

玲奈「ドクターコールお願い、心停止！」

玲奈が患者の心臓マッサージを始める。

医師 B（26）、看護師 B（23）、
が駆けつける。看護師 B が玲奈と心臓
マッサージを変わる。新井と町田が勢

いよく入ってくる。

町田 「どうした？」

玲奈 「1分前に心停止」

新井 「初期波形は？」

玲奈 「P E A」

町田 「わかった。俺は気道側に回って指揮を

取る。新井、原因検索を頼む。高井さん

アドレナリン1 A i vして」

懸命に蘇生が続けられている。看護師

Bと医師Bが心臓マッサージを交代し

て続けている。壁の時計の針が十分経

過する。

町田 「新井どうだ？」

新井 「採血では原因特定できなさそうです。

ただ直前に酸素飽和度が下がるイベントが

あつて……これ見てください」

新井が患者の胸にエコーをあてて心

臓を描出する。町田の顔がこわばる。

町田 「……肺塞栓？」

新井 「心停止原因だとしたら……」

町田「厳しいな……」

顔を見合わせる町田、新井。玲奈がカーテンを開けて入ってくる。

玲奈「家族来てるわ」

町田「入れてくれ……」

玲奈に案内されて長女の慶子（50）

と次女の良子が入ってくる。

複数の管に繋がれた徳次郎が心臓マッ

サージを施されている。

町田「懸命な蘇生処置をしていますが……」

慶子「もうやめてください！」

悲痛な叫びが蘇生メンバーの手を止める。彼らは驚いた表情で慶子を凝視している。

慶子「どうして父はこんな姿になっているんですか？ 町田先生どうして父にこんな苦

しい思いをさせているんです？」

良子「先生は命を助けて……」

顔に怒りを浮かべている慶子。

慶子「命を救うため？ こんなに管に繋がれ

て父が最後を迎えるなんて……。いつも外
来に連れて行ってたけど、もう前みたいに
は頑張れないって……。よく漏らしました」

慶子は足早に父親のベッドの横に駆け
寄り、膝から崩れ落ちて泣いている。
立ち尽くしている町田に新井がおそる
おそる声をかける。

新井「先輩？」

町田は、ベッドの横にいる慶子と良子
に軽く頭を下げ、カーテンを開けて
病室から無言で出る。

○同・医師控室（朝）

町田は椅子に腰掛け、下をむいている。
新井が、町田の目の前にコーヒーが入
った紙コップを置く。

町田「ありがとう」

新井「先輩、全然悪くないですよ。後からあ
あいう言い方するなんて家族も卑怯ですし。
そもそもあんなギリギリで生活していた患

者に治療コードを詰めない外科が――」

町田「新井」

新井の言葉を目で制する町田。町田の視線の先には、黒いスクラブの上から白衣を着ている外科部長の鈴木健（52）が立っている。緑の手術着姿の外
科医A（36）とB（34）が部長の後ろに立っている。

町田「鈴木先生」

鈴木「町田先生、僕の患者が世話になったみたいだね。結果は残念だったけど、懸命に蘇生してくれたとか」

軽く会釈する町田。

町田「力及ばず申し訳ないです。患者の引き継ぎがあるので失礼します」

新井に目で合図して、新井と共に控室から出ようとする町田。

鈴木「長女さんに会ったよ。次女と話して人工呼吸器をつけたって？ 私も驚いたけどね。まさか救急医の先生のエゴではないよ

ね？」

町田の右手が震え、握っていた紙コップがグシャグシャに潰れる。目の奥に怒りを灯しながら鈴木の本を見る町田。

町田「お言葉ですが……先生たち主治医がそのような患者の治療コードを事前にお話になっていないから、今回のような問題が生じるのではないのですか？」

新井「先輩……」

新井が町田の左手を掴むが、町田は振り払う。黙って聞いている鈴木。

町田「僕ら救急医は先生たちの尻拭いではありません。失礼します」

出ていく町田。外科医らに軽く会釈して町田の後ろを追う新井。

鈴木が、外科医AとBの前でつぶやく。

鈴木「でもまあ……彼の言いたいことも一理あるか」

○町田自宅・外観（朝）

静寂の中で小鳥のさえずりが響いている。

○町田自宅・居間（昼）

買い込んだ缶ビールやスナック菓子が袋いっぱい居間の机に置かれている。数個の空き缶が机の上に散らばっている。ベッドの上で寝ている町田。

○前田救命救急センター・ステーション（昼）

新井がパソコンの前に座っている。右

横の椅子に腰掛ける山田（29）。

山田「久しぶり、新井」

新井「お、山田じゃん、院外研修どうだった？」

山田「うちと違って迷わず蘇生みたいな救急患者が多かったから勉強になったよ」

新井「周りにいくつかの病院がある都心部の三次救命センターは羨ましいなあ……」

山田「うちは、ほぼすべての救急搬送患者を

受けているし、ギリギリの患者の治療方向性が決まってなくて、本当大変だよ」

新井「ほんと、そう」

勤務予定表が貼られているボードをみている島崎（30）。勤務予定表の中で誰かを探している。

島崎「ねえ、町田先生は？ シフト表に名前がないんだけど」

山田「たしかに！」

パソコンのキーボードを打つ新井の手が一瞬止まる。

新井「一週間休暇だって」

島崎「あの仕事大好きな町田先生が？」

新井「部長に聞いたたら、有給溜まりすぎていたから、しぶしぶ取らせたって」

○同・医師控室（昼）

三人が紙コップのコーヒーを片手にソファーに座っている。

山田「……そんなことがあったんだ」

島崎「まあ町田先生は初対面の患者でストレスかかるような面談も数多く自分でやっていたからね」

新井「でもその面談も主治医が本来やっておくべき治療コードの問題で、先輩がやらなくてもよかったはず……」

山田「僕らの前では、頼りがいがあった目標の救急医の先輩だったけど、色々溜まっていたのかな……」

医師控室の電話が鳴る。島崎が受話器をとる。

島崎「患者くるって」

三人が医師控室を出ていく。

○町田自宅・居間（夕方）

町田が部屋を掃除していると、棚から一枚の色紙が落ちてくる。落ちてきた色紙に目をやるが、大学サークル時代のものだとわかると気に止めず、棚に戻す。町田のスマホに新井から着信が

鳴る。

○居酒屋・団体席（夜）

室内に入るため、暖簾をくぐる町田。

中では新井、島崎、医師A、新人看護

師が盛り上がっている。

島崎「町田先輩、どうぞ」

ビールの生ジョッキを渡される町田。

町田「久しぶり。あれ山田は？」

島崎「今日は急遽当直してます。町田先輩に

よろしくって言っていました」

新井「休暇中の町田先生に乾杯！」

ビールを一気に飲み干す町田。

○同・カウンター席（夜）

町田が一人カウンターに座っている。

目の前に焼酎の瓶が置いてある。

一人、粛々と焼酎の水割りを飲む町田。

○同・団体席（夜）

酔った新井が玲奈に絡んでいる。

それを横目に見ている島崎。

新井「高井さん、どう思います？」

玲奈「どうしたの？」

新井「外科の連中がね、全然治療コード決めてくれないじゃないですか……ほんと許せないっすよね？」

玲奈「新井先生の気持ち……わかるよ」

新井がカウンターに座る町田の姿を見つける。

○同・カウンター席（夜）

新井が町田の左隣に座る。

新井「せんぱーい、お疲れ様っす。相変わらず酒強いっすね。今日は飲みましょ」

呂律が回っていない新井。

町田「飲み過ぎだよ、新井」

新井「俺の先輩いなくて寂しいです。早く戻ってきてください」

町田の右隣に座る島崎。

島崎「また色々と教えて欲しいです」

町田「ありがとう」

町田は笑みを浮かべる。団体席へ戻っていく新井と島崎。

○同・玄関（夜）

鈴木舞（30）が玄関の扉を開く。店

主の覚知（50）が舞に声をかける。

覚知「いらっしやい！」

舞「まだやっていますか？ 今日はやけに賑やかですね」

覚知「舞ちゃん、久しぶりだね」

町田の左横に、一つ空けて座る舞。

舞「生ビールもらえますか？」

覚知「はいよ、お待ち」

覚知が、舞の前にビールを置く。

出されたビールを飲み始める舞。

覚知「仕事忙しいのかい？」

舞がビールのジョッキを机の上に置く。

舞「訪問看護の仕事は呼びだしも結構あるか

ら……今日は久々のお休みです」

覚知「おつかれさん……」

舞「でも、患者さんの生活に深く関わられるか

ら私は好きかな」

舞が飲んだ空のジョッキを覚知に渡そ

うとして誤って倒してしまふ。ジョツ

キの中の氷が、町田の方向に転がって

いてしまふ。驚いた町田は思わず、席

を立ち上がる。

覚知「すいません、お客さん」

町田「大丈夫です」

舞「すいません、自分も手が滑ってしまつて」

思わず目があう町田と舞。

お互いの顔を数秒見つめている。

舞「町田先生？」

町田「鈴木？」

新井が現れ、町田に肩を組む。

新井「先輩、二次会カラオケです」

新井が横にいる舞を見る。

新井「めちゃくちゃ美人じゃないですか、先

輩の知り合いですか？」

町田「……」

舞「大学のサークルの同期です」

新井「まじっすかぁ。最高じゃないですか。

お名前は？」

新井に戸惑いはじめる舞。

町田「新井、これで会計して先に二次会いけ」

新井「りょうかいです、先輩今度、合コン作

ってくださいね」

新井が小声で町田の耳元でささやく。

新井をはじめ、飲み会のメンバーは店

の外へ出ていく。

舞「町田先生、私の卒業式以来よね？」

町田「ああ、サークルの追いコンだったけ？

懐かしいね」

舞「町田先生、今どこで働いているの？」

町田「前田救命センターで救急医をしている」

舞「すごいじゃん、私のお父さんもその病院

で働いている。偶然だね」

町田「お父さんって、鈴木健先生？」

舞「そう」

思わず噎せる町田。

町田「あ、お父さん最近なんか言っていた？」

舞「特に何も言っていなかったけど、どうかした？」

○同・カウンター席（夜）

町田と舞が話している。

舞「へえ、そんなことあったんだ……」

町田「そうなんよ」

舞「気にしないで。患者さんと向き合って治療コードを決めていないお父さんが悪いと思う」

ジョッキを机に置く舞。

町田「そうなんだ。鈴木はどうして訪問看護師になろうと思ったの？」

舞「元は外科病棟で働いていて、私の受け持ちに森田さんって患者がいたの」

舞は残っているビールを飲み干す。

舞「もう一杯もらえますか？」

覚知「舞ちゃん、飲み過ぎなんじゃない？」

舞「大丈夫」

舞の前に新しい生ビールジョッキが置

かれる。それを手に取る舞。

舞「森田さんは当時、ステージⅣの膵臓癌で

入退院を繰り返していた。化学療法も長い

ことやってたけど、自分の体が徐々に限界

に近づいていることが分かっていたのよね」

黙って聞いている町田。

（回想はじめ 4年前）

○外科病棟（昼）

ナースコールが鳴る。かけつける当時

の鈴木舞（26）

舞「どうしました、森田さん？」

ベッド上の森田（50）が、身をかが

めてベッドの下にあるものを取ろうと

している。

森田「ほんと、舞ちゃんすまんね」

舞「あんま無理しないでくださいね」

舞は自らかがんで、ベッド下にある一枚の写真を見つける。

舞「これですか？」

森田「そうそう」

拾った写真を森田に手渡す。一枚の写真

真には、若い頃のコック姿の森田（3

5）と幼児（2）が一緒に写っている。

森田「俺の一人娘なんだ」

舞「森田さん、娘さんいたんですね」

森田「若い頃の料理人の俺はさっぱりダメだね。食べねえってかみさんが、娘を実家に連れて帰ってもう15年近くよ」

森田「来週頭には娘が成人式かなんかで、こっちに帰ってくるらしい」

舞が神妙に話を聞いている。

森田「一生懸命治療してくれているが、主治医には、俺の体はいつどうなってもおかしくないって言われてな……」

森田「だったらまだ手足が動くうちに、帰っ

てくる娘に、せめて家で手料理くらい作ってやりたいんだよ」

写真見て軽く笑う森田。

（回想終わり）

○居酒屋・カウンター席（夜）

町田「それで森田さんは？」

舞「森田さんの願いは結局叶わなかった。主治医の先生から、自宅療養は急変リスクがあるし、少しでも長く生きたいのなら入院続けて今の治療を続けるべきだって強く言われてね」

舞「それからしばらくして森田さんは亡くなったわ」

町田「そうなんだ……」

舞「それから私は、患者の人生をもっと大切にしたいと思ったの。だから今は訪問看護をしている」

町田「患者の人生を考える……か」

舞「先生は救急医だから、初めての患者を相

手にすることが多いと思うけど、患者と接してきた主治医はちゃんと彼らの人生と向き合うべきだと思う」

町田「確かに向き合えば治療コードも自然と決まってきたそうだね……でも現実はできていない」

町田は、ため息をつく。

○居酒屋・玄関前（夜）

外に出た覚知が、玄関に掛かっている『営業中』の札を裏返し、『支度中』に変えて、店の中に戻る。

○同・カウンター席（夜）

舞「町田先生は、この先何かやりたいこと決まっているの？」

町田「部長にも言ったけど、正直まだ決まっていますかねえ……」

舞「訪問診療とか興味ある？」

町田「訪問診療？」

舞「色々な事情で病院の外来に通えない人の生活の場に伺って医療を提供したり、相談の窓口になったりする。彼らの生活の中で医療がサポートをするイメージかな」

町田「何で俺に？」

舞「治療コードも含めて、自分が主治医だったら何かできることがあるはずって顔に見えたけど……」

ハツとした表情を浮かべる町田。

舞「医療が患者の人生を決める世界が当たり前だったと思うけど、今度は彼らの人生で医療を決めてみない？」

舞がカバンの中から一枚の名刺を出して、町田の座る机の上に置く。

名刺には、『村井訪問診療所』と書かれており、連絡先が載っている。

町田「村井訪問診療所？」

町田は、渡された名刺に目をやる。

○居酒屋・玄関前（夜）

目の前に止まっているタクシーの後部
後部座席の扉が開き、乗り込む舞。
タクシーを見送る町田。

○商店街・アーケード出口（夜）

町田はスマホの画面を見ながらアーケ
ードの出口を出て住宅街に入る。

町田は足元にプラスチックのネームプレ
ートが落ちているのに気づく。『村
井訪問診療所 アシスタント（看護師）
金城恵』と書かれている。

○住宅街・路地

町田がスマホを見ながら歩いている。

○村井診療所・外観

町田の目の前に古いプレハブが建って
いる。『村井訪問診療所』と書いてあ
る立札。村の表記に違和感を覚え数秒
間、看板を見つめる。少し首を傾げな

がら玄関に向かう町田。

○同・玄関前

玄関の前にある呼び鈴を鳴らす町田。

金城（声）「はい、村井訪問診療所です」

町田「すいません、落とし物届けにきました、

町田と言います」

玄関の扉が開く。町田の前に金城恵

（36）が立っている。

町田「すいません、昨日夜に拾ったんですけ

ど……」

ポケットからネームプレートを出し、

金城に見せる町田。

金城「探していたの。ありがとう」

町田が金城を見て軽く頷く。

金城「ごめんね、わざわざ届けにきてくれて」

町田「いえいえ」

舞「金城さん、頼んでいた点滴ってこれでし

たっけ？」

点滴類が入った段ボールを抱えて玄関に姿をみせる舞。目があう町田と舞。

舞「町田先生」

町田「おう……」

町田は舞に軽く合図を送る。

金城「無くしたネームプレート、届けに来てくれたの。舞ちゃんの知り合い？」

舞「大学の時のサークル同期で、今は前田救命センターの救急医なんです」

○村井訪問診療所・応接室（昼）

ソファーに座っている町田。金城が机の上にお茶とお菓子を置く。

金城「ごめんね、こんなものしかないけど」

町田「いえいえ。すいませんわざわざ……」

金城「救急医って忙しくて大変よね。今日はお休み？」

町田「今、休暇中……」

金城「本当ごめんね」

町田「気にしないでください」

金城「うちは病院みたいに大掛かりな手術や
処置はできないから、救急医の町田先生か
らしたら地味かもしれないけど……」

町田「そんなことないですよ」

町田が診療所の内観を見渡す。壁に飾
っている患者からの感謝の手紙や品が
目に留まる。点滴の入った段ボールを
運んでいる舞。

舞「町田先生も、いろいろあるみたいだし、
一度、訪問診療の見学してもらったらどう
ですか？」

金城「いろいろあるの？」

町田が発言を遮るような鋭い視線で舞
の方を見る。

町田「鈴木」

舞「ごめん、つい……」

金城「院長も大歓迎だと思うよ」

町田「せっかくの申し出で嬉しいのですが――
――」

舞「いいじゃない。先生今週まだ予定ないっ

て言っていたしー」

町田が再度、鋭い視線で舞の発言を遮る。

舞「あ、ごめん」

町田「休みとはいえ、勉強しないといけないことも多いんで。僕はこれで失礼します。ご馳走様でした」

軽く会釈して玄関の扉を開けて出ていく町田。

○町田宅・居間（夕）

町田が玄関から居間に入ってくる。つけっぱなしだったTVに目をやる。

○テレビ局 スタジオ（夕）

キャスター（40）と訪問診療医（50）が話をしている。

キャスター「2025年の問題もはじめ、日本の高齢化社会が加速していますがこの日本の医療の行末を、訪問診療の先生は

どう考えていますか？」

訪問診療医「病院やクリニックにおける外来の需要・供給バランスも考慮すると、医療の難民がさらに増え、医療の場が自宅や施設になっていく患者さんが増えていくでしょうね」

（回想はじめ 十五年前）

亜由美「今日の模試頑張っただね、これお守り」

亜由美は、玄関先に立つ町田の手にミ

サングを握らせる。

町田「いけないよ。こんないきなり付けたら笑われるよ」

恥ずかしそうな表情を見せる町田は

ミサングを机の上に置く。

亜由美「せっかく作ったのに……」

町田「行ってくる」

亜由美「行ってらっしゃい」

亜由美が笑顔で町田を見送る。

○学校・校門（夕）

町田のポケットに入れている携帯に着信が鳴る。電話を取る町田。

○前田救命センター・集中治療室（夕）

人工呼吸器を付けた亜由美がベッドで寝ている。医療スタッフがケアをしている。ケン（50）が町田をベッドサイドに案内する。

ケン「呼吸不全で、心臓が止まる寸前だったよ。なんとか今は落ち着いている」

町田「そうだったんですね……ありがとうございます」
「ごまいます」

ケン「お母さんが肺の難病を患っていることは？」

町田がうなずく。

ケン「ちょっとした風邪をこじらせると一気に肺が悪くなるんだけど、この経過だとしばらく我慢していたのかもしれないな」

町田「多分俺に気遣って、無理をしていたん

だと思っています」

ケン「確かにお母さんの体では外来通うのも負担になるし、せめて早めに抗生物質を処方できる環境があればな……」

ケンがポケットからミサングを取り出して町田に見せる。

ケン「搬送中に握りしめて、息子さんの名前を呼んでいたそうだ」

町田がミサングを手に取り、涙を浮かべる。

町田「母は……母はどのくらいで良くなるんですか？」

ケン「肺の持病もあるからまだわからないけど……まずは呼吸器が外れるかだな」

町田「繋がったままってことですか？」

ケン「治療始めたばかりだから、今は回復を祈るしかないよ……母ちゃんのそばについてあげな」

（回想終わり）

○伊祖療養病院・病室

町田がスピーチカニューレを装着している。亜由美（55）と話している。横には人工呼吸器が置かれている。

亜由美「仕事は頑張っている？」

町田「まあまあかな、母さんは元気？」

亜由美がうなづく。

亜由美「表情がさえないよ、大丈夫？」

町田「大丈夫だよ、心配しないで」

呼吸がやや荒くなってくる亜由美。

町田は呼吸器をカニューレに繋げる。

亜由美がホワイトボードに何か書いている。

亜由美「（ずっとしゃべれないのは辛いね）」

町田「そうだね……でも母さんは意識もあって呼吸器を外せる時間もあるからまだ良い方なのかもね……」

町田は、病室内にいる意識のない状態で人工呼吸器が繋がれている患者達に目を向ける。

町田 N 「僕らは彼らの人生を本当に救えていたのだろうか……」

○伊祖療養病院・玄関

町田が病院の玄関を出る。

○村井訪問診療所・玄関前（朝）

玄関前に立つ町田。右手で呼び鈴を鳴らす。玄関が開く。村井正和（50）が立っている。右親指を隠している。

町田 「はじめまして、診療見学に来た町田と申します」

村井 「院長の村井です。話は聞いています、どうぞ」

町田が診療所に入り、ドアが閉まる。

（第二話 「決意」に続く）